

トウンリリミス
小説リライト
「魔女と王さま」(前章)

2023/07/14



エリー

目次

0章	プロローグ	1
1章	王子・バニラ	2
2章	従者・アーモンド	4
3章	魔女・ニニー	6
4章	バニラ王子の魔法修行	8
5章	バニラ王子と魔女ニニー	10
6章	王女・クミン	12
7章	クミン王女と、魔女・ニニー	14
8章	従者アーモンドと、魔女・ニニー	18
9章	バニラ王子と、クミン王女	20
10章	それぞれの旅立ち	23

0章 プロローグ

風が吹く。魔女たちは空を飛び、人々はその姿を仰ぎみて、歓声を上げる。王都では煌びやかな衣装をまとった貴族たちが、町では穏やかに笑う市民たちが、みな人生を謳歌し、世界は平穏に過ぎていく。

かつて、二度の世界大戦が起きた。

風の魔女たちは異端と退けられ、自然は破壊された。科学が隆盛を極めたが、失ったものは大きい。そして魔女たちは決断した。

——失ったものを取り戻すために……並行世界へと、旅立とうと……。

風の魔女たちの願いは一つ。

——次は、間違った『道』を歩かない。

——『約束の子ども』とともに、正しい『道』を目指そう。

そうして、魔女たちは、電気も蒸気機関車もないトゥンリリミスへと旅立った。グリーンさまを信仰するグリーン教が進行される世界で。

いま、新しい旅路が始まる……。

1章 王子・バニラ

その城は、小高い丘の上に建っていた。中央が三階建てで、左右に大きな長い塔が並んでいる。左手の塔の脇に魔法宮の校舎があり、聖なる森に続いていた。

城を中心に森と庭をぐるりと囲う城壁があり、四方に城門があり、中央の門はひときわ大きい。

そんなエルメダラ王国の広い宮殿の中庭に、今日も執事の声が響いていた。

「バニラ王子！ また、悪戯ですか！」

色とりどりの花が咲く春の庭園は、王子のバニラ色の髪も隠してしまいそうだった。すらり通った鼻筋。ふっくらとした淡い珊瑚色の唇。少し垂れた目が、その穏やかな性格を表しているが、目の奥の光には才気があふれている。聡明で慈悲深いと評判の王子であった。

「イタズラじゃないよ。花と虫は共存しているんだって。木々のなかに隠れて、虫たちは繁栄して……」

「王子さまは、そんな事まで学ばなくてもよいのです！ ええい、アーモンド！ 貴方が王子様を止めないと！」

アーモンド、と呼ばれた褐色の肌をした少年は、目をぱちくりさせた。ここで自分の名前が出てくるとは思わなかったとも、いつものことだから慣れていても、どちらとも取れる顔をしている。

「執事！ なぜアーモンドを責める。悪いのはこの僕なのだろう？」

「しかし、アーモンドは、バニラ王子の付き人ですから……」

「僕が王子だから、僕を怒らずに弱い立場のアーモンドを責めるのか。それは、グリーンさまの御心なのか？」

「いえ……。そんなことは……」

「だろう？ アーモンドを責めるのは、僕を怒って父陛下に睨まれたくない執事の心の弱さの表れだな」

そう言って、王子はフフッと笑う。言い負かされた執事は両手をあげた。「まったく、この王子は口も頭も達者だ！」というように。

「あっ。王子！ サナギが蝶になりますよ！ ほら！」

「アーモンド、虫かごを取ってくれ。一緒に捕まえよう！」

「だめですよ。蝶は自由に羽ばたいているのが素晴らしいのです」

褐色の肌のアーモンドの言葉に、バニラ王子も頷く。その瞬間、硬いサナギをやぶって、緑色の蝶が姿を現した。白い雲を目指すかのように羽ばたいていく姿をみて、思わずバニラ王子は呟く。

「美しいな……」

「ええ。グリーンさまのような、素晴らしい萌黄色でございますね」

バニラ王子と、アーモンドは、いつまでも蝶を見上げていた。まるでそこに、グリーンさまがおわすかのように。

2章 従者・アーモンド

アーモンドは、つくづく不思議に思うのだ。

蝶を見送った後、しびれを切らした執事に強引に部屋に戻されたバニラ王子は、文句を言いながらも幾何学の勉強を始めている。十六歳の王子は、毎日何十科目も勉強しており、その頭脳は、遠い島国であり友好国であるサンサリーン王国まで轟いているという。

一方で、アーモンドと、蝶を追って喜ぶところもある。自分のような、スラム街の孤児をと、アーモンドは深いため息をついた。王子バニラは身分の差など気にしないが、執事のように、アーモンドを見下す人は何人もいる。いや、そういう人のほうが、圧倒的に人数は多いのだ。

「どうした？ アーモンド」

「つくづく、この世界は不思議だと思ひましてね」

「なんだ、哲学の話か？ それとも、神学か？」

「グリーンさまの神学のほうでございます」

「ふむ。それは重要な問題だな」

バニラ王子は手を止めたが、家庭教師も怒りはしなかった。この国——いや、この世界において、グリーンさまに関して考えることは尊いことであったからだ。

「魔女たちはこう伝承するな。『神であるグリーンさまは、宇宙生命体。あまりにも大きすぎる存在だからこそ、自分では動けない。だから魔女が体を保ち、実情を探り、より良き未来を選択するのだ』と」

「ええ。グリーンさまは、森のような存在。大きな森に生えた小さな花は、森が安寧であることを願っている。地震や火災が起きることを恐れて、常に適切な量の雨と日光が届くことを祈っている……」

歌うように告げるアーモンドの言葉を、バニラ王子が引き継ぐ。

「でも、森は見守るだけで、花に直接作用はしない。花も、段々と、森が「在る」ことだけでも、ありがたく思うようになる。花は、森がなければ存在できないのだから……、と」

「花は森に感謝し、自分自身が生きるために尽力する。そうして森は今日も、花を見守っている、ですね」

見守っていた家庭教師は、思わず微笑んだ。

王子の利発さに負けないほど、アーモンドも、グリーン教について理解していると思ったのだ。アーモンドは、嘆息する。

「でも、最近では、魔女の信仰を異端として退ける国も出てきましたよ」

「そうだな……」

今度は、バニラ王子がため息をつく番だった。バニラ王子の父である国王も、その問題は由々しいものだと考えているからだ。

——神様がいるのなら、何故、自分はこんなに不幸なんだ。

——神様がいるのなら、もっと自分を愛してくれ。幸福にしてくれ。

教会にも、そう文句を言う人々が後を絶たない。

それはおかしい、とバニラ王子も思う。だが、彼らを変えるための方法が、具体的には、まだ分からないのだ。どうやったら、彼らが、自分の力で立ち上がれるのか。神様にたよらずに、自分自身で生きていけるのか。

「早く大人になりたいなあ」

「バニラ王子。どうしたんですか、急に」

「大人になれば、この疑問も解消されるかもしれないじゃないか。早く、大人になりたいよ。僕は……」

バニラ王子は十六歳。母は早くに亡くなり、父王の一人息子として英才教育を受ける日々だ。唯一の癒しは、アーモンドと抜け出す庭園だけ。

寂しい、と言ってもおかしくない現状だ。だが、そんな王子にも、人生を変えるような出会いが訪れる。ひとは、適切なタイミングで、大事な人に会うものだ。

バニラ王子の場合は、魔法使いになるための試験の日の出来事だった。

3章 魔女・ニニー

誰もいない螺旋階段を、二人の足音がのぼってゆく。一人は、まだ幼い少女。肩で揃えられた赤みかがった金髪は風に揺れ、つり気味の赤茶の瞳は好奇心にキラキラ輝き、薄紅色の薄い唇は微かに微笑んでいる。

「ニニー、準備はいいかい？」

「もちろんです。ゲウム叔父様！」

「お義父様と呼びなさい。君は今は、私の養女なんだからね」

そう言われても、ニニーは小さく唇を突き出して、首をかしげる。

「だって、ゲウム叔父様。ゲウム様は、このエルメダーラ王国の宰相様でしょう？ 聡明と評判の王子バナラ様を教育し、王様の右腕としても辣腕をふるっているって評判です。そう簡単に、お義父様って呼べません」

「そもそも君は、私の妹の娘だ。姪っ子にあたるんだから、もう少し、打ち解けてくれてもいいものだがね」

「それは.....できません」

ニニーの声が、少し暗くなる。過去にあった何かを思い出しているようだった。

ニニーと同じく赤みかがった金髪をもつゲウムはそれを察して、ニニーを持ち上げる。

「きゃ、ゲウム様！」

「ごらん。この塔からは、この国のすべてが見える」

ゲウムの腕のなかで、ニニーは塔の外に広がる城下町を眺めた。その向こうには、大きな山も見える。風を受けて、ニニーの髪が大きく揺れた。

「わあ.....！」

「この世界が、我が父であり、君にとっては祖父であるマグノリアが守ろうとしたもの」

「大魔法使いのマグノリア様ですね。私は会ったことはないのですが」

「君が生まれる前に、失踪してしまったからね。だが、父マグノリアは、確かにグリーンさまの声を聞き、この国に繁栄をもたらした」

「素敵だわ！」

「だが、父・マグノリアは、放浪癖もあったし、神聖視されることを嫌ったからね。父が逃げたおかげで、私がこの国の宰相だ。ま、そんな父のダメなところも受け入れて、私が身代わりにこの国を守っているわけだが」

苦笑するゲウムは、まるでどこにでもいる父親の話をしているようだった。だが、マグノリアといえば『聖人』であり『英雄』であり、この世界に生まれたなら、知らないものは誰もいない。

そんな父を持っても気負うこともなく、まっすぐに立ってられるゲウムも、また傑人と呼べるかもしれない。

「そうですね。私も、ただのニニーです。おじい様が誰であっても、叔父様のゲウム様がえらい人でも、関係なく、私は私……。そうだ！ 早く試験会場に行かなきゃ！」

ハッと気づいたニニーは、ゲウムの腕から飛び出して、箒を取り出す。塔から飛び去ろうとして、ふと、遠くの山を見つめる。

「ゲウム様。あの山のふもと、ひどい荒れ地があります。一体どうしたんでしょう？」

「ああ。あれは、隣の国との辺境の地だ。まだまだこの国には、未開の地もある。あそこに住んでいる人々にも、幸福な恩恵を授けたいものだが……」

ニニーは考え込む。王様は、民思いの素晴らしい人だ。圧政も敷かず、国民の声をよく聞いている。王子のバニラ様も優秀な人だと聞く。それでも、手つかずの土地があるのだ。

箒を持つ手に、力を込めた。

今、ニニーに出来ることは少ない。バニラ王子に比べれば、四つも年下。早く大人になれば、この国のすべてを、救えるかもしれないのに。そのためには、沢山勉強することだ、と思った。

「ゲウム様、行ってきますね！」

「ああ。ニニー、気を付けてね」

塔の上の景色を見せたいと思って連れて来たゲウムも、目的を果たしてニニーを送り出す。帰りも螺旋階段を想定していたが、仕方ない。

「ニニーは、『約束の子ども』。私の手のなかに留めておけるなんて思うほうが、間違いだな……」

ゲウムは、ニニーの去り行く背中を見ながら、そう呟いた。

「どこまでも、飛んでいきなさい。ニニー。君はどこまでも、自由だ……」

風が強く吹いている。新しい絆を結ばせるように。

なによりも、新しい出会いを、後押しするように。

4章 バニラ王子の魔法修行

本来なら、バニラ王子は、魔法使い試験を受けるはずがなかった。

生来は王様になるべきで、魔法使いになるはずはないのだから。だが、バニラ王子には夢があった。

——もっと広い世界が見たい！

今、王子が行ける場所には限りがある。田舎や、山奥や、海辺や、辺境の地は、本でしか知らないのだ。様々な地域や国のことを本で知っても、その場所の特産品を目にすることも、その場所の特有の文化を享受することもできないのだ。

「箒で空を飛べるようになれば、もっと遠い場所に行けるはずだ……」

そう思った王子は、箒の練習を始め、魔法の読むような本を入手し始めた。

国王も、国政の邪魔にはならないと思って反対しなかった。なによりも、国王の右腕である宰相・ゲウムが、大魔法使いの息子なのだ。王子にとっても、魔法使いの勉強は糧になるだろうと思ったのだ。

だが、王子は、魔法の勉強に想像以上にのめりこんだ。

「バニラや。最近、夜あまり眠っていないと聞くが……」

「学びたいことが沢山あるのです。父上」

「体は壊していないか？ アーモンドも心配しておったぞ」

「大丈夫です！ 回復薬も作れるようになりましたから！」

「そう言う問題ではないのだが……」

王子の言葉に、国王も、ほとんど困り果てていたのだった。とはいえ、その熱中ぶりを止めることもできない。何かに熱心になっている若者を制止することほど、愚かなことはない国王も知っていたからだ。

王子はもともと、自分の人生は自分で決める、と決意しているところがあった。

街歩きをしていたバニラ王子の懐のものを狙ったアーモンドを王宮に引き取ったのも、沢山の人の意見を聞きたいという理由からだ。もちろん、従者は反対したが、バニラ王子に忠誠を誓ったアーモンドと、アーモンドから庶民の生活を学ぶバニラ王子を見たら、受け入れるしかなかった。

バナラ王子が占いの館で宣託を受けたのは、緑の蝶が庭園を羽ばたいてからすぐのことだった。

「あなたの未来は、『塔 16 正で火星』」

老いた占い師の言葉に、バナラは首を傾げた。

「女が振り向いてくれた時、大改革がおきるだろう。そして戦いが始まる」

「戦い……」

それは、ぞっとするような言葉だった。二度の大きな戦争の傷跡は、幸福に満ちているようなこの国にも残っている。戦火をまた経験するのかと思うと、王子としては一層身が引き締まる思いだった。

「付き人のお前。お前の未来も、『塔 16 逆で火星』だ」

「バナラ王子と同じってこと？」

「左様。お前も、改革に身をささげる」

「二人とも、女、か。まさか、バナラ王子と同じ女じゃないですよね」

アーモンドは笑っていったが、バナラは苦い顔をしたままだった。占い師は、大改革が起きる、とも言ったのだ。戦争と、改革。その二つに備えるには、もっともっと力と知識をつけなければいけない。

そうして、バナラ王子は、魔法使いの修行も始めたのだった。

5章 バニラ王子と魔女ニニー

過去の思いにふけりながら、バニラ王子は拳を握る。あれから四年が経った。魔法使いの試験会場で、いまいちど、改革と戦いのために力をつけることを決めたのだ。

だが、その時だった。

「きゃー！ ごめんなさい。その人、避けて！」

空から、声が降ってくる。思わず顔を上げると、そこには、箒にまたがった赤髪の少女がいた。

「えっ。どうして、そんなところに」

バニラ王子が驚いて口に出すが、その前に、ニニーが「きゃー！」と言いながら、バニラ王子の上に落っこちた。

「バニラ王子！ 大丈夫ですか！」

「王子様！ 救護班を呼びますか？」

「王子様、お返事をいただきたく！」

周りの人々が、口々に叫んでいる。だが、そんな声も、バニラ王子の耳には届かなかった。バニラ王子の上に馬乗りになったニニーは「いたた」と言ってから、王子の水色の目を見つめる。

「ごめんなさい！ あの塔の上から飛んできたんだけど、慣れない風の匂いに箒がびっくりしちゃったみたい」

「君は……」

「あ、私、ニニー！ 魔法使い試験にやってきたの！」

ニコリと笑う少女に、バニラ王子は息をのんだ。今まで出会ったことのないような女性だった。闊達で、陽気で、その笑顔を見ているだけで癒される。

「あの塔って、もしかして、この国に象徴の時計塔？」

「ええ！ ゲウム叔父様に連れて行ってもらったの。国中が見えて、とっても素敵ね」

ニニーの発言に、教師陣も周りの人々も驚く。

「つまり君は、マグノリア様の孫で、ゲウム様の姪にして養女のニニーか……」

アーモンドが目を見張ったまま呟いた。ニニーは、頬を膨らませる。

「おじい様と、おじ様は関係ないわ。私、魔法使い試験に遅れちゃってるかしら？ まだ、試験を受けさせていただける？」

困ったようなニニーに、試験官が苦笑いする。

「あの時計塔から飛んできたのでしょうか？ だったら、否応なく合格ですよ。ただし」

「え？」

「お早めに、王子様のおなかの上からどいて頂けると嬉しいですね。みんな、困っておりますから」

「あっ。ごめんなさい！」

ニニーは慌てて、バニラ王子の上から身を引く。だが、バニラ王子は、そんなニニーの顔が頭から離れなかった。

「妻に欲しい……」

思わずそう呟いていたことに、バニラ王子自身ですら、気づかなかったほどだ。ただ、隣にいたアーモンドだけが、その声に気づいていた。今まで女性のことは全く気にしなかった王子様が、初めて誰かを望んだ、と。

6章 王女・クミン

バナラ王子が初恋に胸を躍らせている時、エルメダーラ王国から、遙か南方にあるサンサーリン王国からはクミン王女がやってきていた。

黄金色に焼けた肌は健康そうに輝き、結い上げた金髪は太陽のようだ。だが、クミン王女は寂しそうな影のある眼差しで、沈痛な面持ちをしていた。

王子には思い人がいるという噂を聞いてしまったのだ。勿論、ニニーのことである。

クミン王女は、サンサーリン王国の第一王女だった。青く輝く海に、黒い影となる魚たち。水色の空に、黄色い太陽。カラフルな色彩に満ちた王国で、自然のなかを自由に跳ね回って生きて来た。海で泳ぎ、ヤシの木に登ってヤシの実を取り、穴を空けてココナッツジュースを飲む。

サンサーリンでは、誰もが6歳までは神の子どもとして遊んで過ごす。王族のクミンも例外ではなかった。そして、7歳まで生き延びた子どもは半人前と認められ、大人の仲間入りを果たすのだ。特に王族のクミン王女は、人々の手本となる形式美を体現することを求められてきた。

「クミンさま、最も美しいと思う挨拶を明日までに考えてきてください」

七歳のとき、クミン王女の家庭教師は、そう告げた。今まで自由闊達に生きて来たクミンは、片手を上げたり、腰を振ったり、いろんな挨拶の仕方を試してみて、最後に逆立ちすることを思いつく。だが、どれもしっくりこない。

翌日、家庭教師の前で試してみたが、

「ユニークではほえましい」

と微笑まれるだけだった。怒られなくてよかったと思いつつも、何かが間違っているらしいとも気づく。

「では、クミンさまの挨拶とわたしの挨拶、どちらが美しいか教えてくださいね」

そう言って、教育係は、背筋をまっすぐ伸ばし、流れるような軽やかな足取りでクミンの前に進み出ると右手を折り曲げて軽く会釈した。

「先生の挨拶の方が、ずっと美しいわ」

「まあ、ありがとうございます。クミン王女」

「どうして、正しい仕草を知っているのに、わたくしに考えさせたの？ 教えて下さればよかったのに」

「それでは、進歩がありませんわ」

「進歩……？」

「ええ。伝統的な挨拶より素晴らしい挨拶をクミン様が思いついたならそれを伝統となさればよろしいでしょう。思いつくまでは伝統を見習うべきですが」

クミンは、ハッとした。そんな風に考えたことは、一度もなかったのだ。クミンは、自然のなかで遊び、自由に生きて来た。自分は万能だとも思って来た。だが、自分にもまだ足りていないところがある。それを埋めながら大人になるのだと思ったら、ワクワクもしてきた。

「わたくし、将来は、エルメダーラ王国で事業を起こしたいと思いますわ！」

「まあ、いきなりですわね。クミン王女」

「だって、見映えのいい動作は、無理をしているでしょう。本に頭をのせて歩くのも、ダンスを美しく踊るのも、意外と大変なんですもの。どちらも大変ならば、文化の国・エルメダーラ王国で新しいお店を開いてみたいんですの！」

家庭教師は、どう伝えていいか悩んでいる風だった。だが結局は、「王女様」と深刻そうに囁いてから、こう告げた。

「王室に生まれたものの責務がございます。クミン王女様は第一王女。どこかの王家に嫁ぐか、グリーンさまに仕えるか。この二つしか、道はないのでございます」

クミン王女は驚いた。南東の小さな島サンサーリンは、作物が育たない。かつては魚を食べて生きていたが、中央の聖なる山を信仰する人々が観光に訪れるようになり、観光立国として豊かになったのだ。やがて観光による収入が莫大になり、独特の衣装や挨拶が喜ばれるようになった。このサンサーリン王国を存続させるには、自分は結婚するか巫女になるかしかない。

クミン王女は考えた末に、王妃になる道を選んだ。グリーンさまに仕える道も捨てがたかったが、エルメダーラ王国に行ってみみたい気持ちも強かったのだ。

7章 クミン王女と、魔女・ニニー

クミンの妹は、グリーンさまに仕える道を選んだ。

「マグノリア様のように、いつか、わたくしにも、グリーンさまのお声が聞こえたら……」

それが、妹の口癖だった。サンサーリン王国は、クミンの弟が継ぐことになり、クミンはいよいよ、エルメダーラ王国へと来たのだ。

だが、大事な舞踏会の前日に、王子は恋をしているという噂を聞いてしまったのだ。

今まで、どこの国の舞踏会に出ても、誰もがクミンに心を奪われた。

優雅なのに、どこか寂しさのある神秘的なクミン王女。洗練されたドレスと、優雅な身のこなしと、そつのない会話。完璧すぎないところまで完璧な、この世のすべての栄光を受けるべき王女だと、誰もが噂した。

そのクミン王女が、舞踏会では、王子にダンスを誘われないだろうと噂されているのだ。ずっと憧れていたエルメダーラ王国だからこそ、絶望もひとしおだった。

ため息をついて、夜の宮廷の廊下に出る。豪華な赤い絨毯が敷かれているが、クミン王女の足取りは覚束なかった。

庭園に出ると、白い花が月光に照らされていた。緑色のサナギが一つ出来ており、その前に座る。と、可愛らしい声が聞こえた。

「あっ。それは触っちゃだめだよ！」

こんな夜中に一体誰だろうと思って振り向くと、箒をもった少女だった。

「そのサナギは夜に羽化するんだ。……ほら」

少女の言葉につられるように、サナギの背中がひらき、美しい新緑色の蝶が羽根をひろげる。月光の下で羽搏く姿が、まるで自由の象徴だった。

「美しいわ……」

「でしよう。この蝶は、グリーンさまの吐息とも言われてるの。王様や王子様も愛していて、この庭にも沢山いるから研究しているんだけど……」

そこまで言って、少女は自己紹介がまだだと気づいたらしい。

「私はニニー！ あなたは？」

「まあ。あなたがニニー？」

「知っているの？」

「バニラ王子の初恋の人でしょう。みんな、噂してますわ」

「えっ。そうなの!？」

ニニーは目を見張る。いつも空を自由に飛びながら、好きな場所に行って、好きに過ごしているのだ。周りの噂なんて、耳に届くはずもない。

「わたくしは、サンサーリン王国のクミン。今回の舞踏会のために来たんです」

「へえ。じゃあ、何になりたいの？」

「えっ」

「王女様でも、なりたいものがあるんじゃないの？ 私はね、魔女になるの!」

元気にいうニニーに、クミン王女は答えられなかった。

——王妃を目指す生き方で、いいのかしら？

——伝統を守る生き方で、本当にいいのかしら？

——家庭教師は、本当は新しい風を巻き起こしてほしいと思っていたわ。でもわたくしは改革のアイデアが出せなくて……。守るだけで挑戦できなくて、いいのかしら？

黙り込んだクミンに、ニニーが気遣うように声をかける。わざと明るいふりをして、励ますように告げる。

「私はね、辺境の地を開拓するんだ!」

「まあ。一体、どうして？」

「この豊かな国でも、困ってる人がいる。そんな人たちを助けたいの!」

「それが目標なんですね」

「うーん。本当の目標はほかにもあるんだけど……。まだ、秘密。誰にも内緒なの!」

悪戯っぽく言うクミンに、思わずニニーも微笑んでしまう。ニニーの前では、誰でも笑顔になれるのだ、とクミンは知った。だからこそ、バニラ王子も惹かれたのだろう、と。

「ニニーは、わたくしのあこがれね」

「えっ。どうしたの、急に」

「ニニーのおじい様は、マグノリア様でしょうか？ グリーンさまのお声を、唯一聞いた方」

「まあ、そうだね。おじい様のことは、私にはあんまり関係ないけれど」

「ニニーは謙虚ね」

フフッとクミン王女は微笑んだ。祖父が偉人なのだから、その権力をカサにきてもおかしくない。けれど、ニニーを見ていると、絶対にそんなことはしない人に見えた。

「マグノリア様は、箒でこの星を七周はしたのでしょう」

「そうだね。東から西、北から南、東北から南西、東南から西北。それから、聖地から聖地を三回巡ったって」

「最後に聖なる山のあるわたくしたちの国、サンサリーンにこもり、グリーンさまに恋の歌を捧げ続けたのですわね。三ヶ月飲まず食わずで歌い続け、死を覚悟したその時、島中の人々が音楽を聞いたと」

「そうらしいね。グリーンさまがマグノリアの呼び掛けに応えたと考えて、サンサリーンの民は、返礼の歌を作り、祭典を開いたんだよね。マグノリアの呼び掛けの歌。グリーンさまの祝福の旋律。返礼の祭典の歌」

「ええ。その三曲を聖典として、マグノリア様を教祖とする新グリーン教を興そうとしたんですの。けれども、マグノリア様は、また放浪の旅に出てしまわれて……」

そこまで言うと、ニニーが暗い顔をした。

クミン王女もすぐに察して、明るい声で続きを告げる。

「でもわたくし、マグノリア様の気持ちが分かるような気持ちがするんですの」

「そうなの……？」

「ええ。自由でありたい。自分らしくありたい。そう思うのは、当然のことですもの。わたくしだって……」

言葉が続けることはできなかった。クミン王女は、サンサーリン王国の第一王女だ。その責務を投げ出すことは、やってはいけないのだから。

だが、ニニーは、クミン王女の隣にちょこんと座ると、首を傾げた。

「クミン王女も、自由に生きていいんだよ」

「えっ？」

「国は滅びる。人は死ぬ。だからさ、自分のやりたいようにやらないと。自分らしく生きないとね」

ニカッと笑うニニーに、クミン王女も思わず笑ってしまう。

あまりにもクミン王女の常識とかけ離れていて、だからこそ、逆にその通りに思えた。自分らしく生きる。その言葉が、クミン王女の胸をつく。

「マグノリアの血を引くとなれば、ニニーも期待が大きいでしょうね。それでも、自分らしくを貫くニニーを……尊敬しますわ」

わたくしも、ニニーのように生きたい。ニニーのように明るく笑いたい。

クミン王女のなかで、ニニーは、より強い憧れの存在になった。

ニニーは「大袈裟だよ」と笑いながら、新緑色の蝶を見上げる。朝陽が昇って来た。舞踏会の朝がやってきたのだ。

けれどそこには、先ほどまでの憂鬱な気分は、もう、なかった。

8章 従者アーモンドと、魔女・ニニー

舞踏会は予定通りに開かれた。

クミン王女は影のある雰囲気は消えてなくなり、すでに母のような慈愛に満ちた表情を見せ、絵に描いたようなドレス姿で人々を魅了した。

バニラ王子も、完璧を求められて準備していた。招待客の出身地と年齢と略歴を暗記し、誰にでも親友のように挨拶できるようになった。

どの客も公平になるよう各国から特産品を取り寄せた。

「一番身分が高いのは、グリーン教の聖地サンサリーンの王女クミンですな。まずは、クミン王女から、挨拶してダンスをしてくださいね」

執事にそう言われたが、バニラ王子はすぐには頷けない。今回の舞踏会は、王子の婚約者選びも兼ねている。つまり、最初のダンスは、プロポーズの意味があるがあるのだ。——必ず、ニニーと踊りたい。

固い覚悟で、バニラ王子は当日に望んだのだ。

だが、ニニーは舞踏会に来なかった。

席も用意して、招待状も送ってある。それなのに、ニニーの姿はいつまでたっても現れない。病気やケガかと思ったが、宰相のゲウムが気にしていない風をみると、大事にはなっていないのだろう。だが、ゲウムを公衆の場で問いただすわけにはいかない。

ついに、バニラ王子は従者のアーモンドを呼び出した。

「ニニーを見つけて、舞踏会に連れてきてほしい」

アーモンドも、ニニーがバニラ王子の初恋の相手だと知っている。

「絶対に、十二時までには連れてきます」

そう約束して、舞踏会を飛び出した。美味しい食事や楽しいダンスよりも、王子との約束の方が勝ったのだ。

王宮から飛び出すと、町が人々でにぎわっていた。王子の舞踏会が開かれている今日、街の人々も、互いのパートナーを見つけるお祭りを開いているのだ。

「おっと」

人混みをかき分けながら歩くアーモンドは、人混みが多すぎて見つからないと思い、国のシンボルの時計塔にのぼった。初代国王が建てた時計塔だ。ニニーがゲウムの腕のなかから、箒に乗り換えて、バニラ王子のお腹の上に着地した、あの時計塔でもある。

「あれは……」

すると、奥の山のほうに、ぼんやり明かりが見えた。

「もしかして、魔女の修行の灯か！」

そんな予感がして駆けつけた。鐘が鳴る。すでに十時。早く、ニニーを見つけなくては。

森の中には、円の中に六芒星を描き、6つの角にろうそくを立てて、中央で祈りを捧げるニニーがいた。

声をかけようとして、アーモンドは戸惑う。ニニーは、あの試験の日と同じように、赤に近い髪を風になびかせながら、修行している。

——考えてみれば、確かにそうだ。

と、アーモンドは思う。

魔女になるために奮闘しているニニーなら、煌びやかなドレスに身を包むことよりも、修行を優先するだろう。ハーブを採取し、その薬効を調べることのほうが重要だと思うだろう。

だが、親友でもある王子との約束もある。連れて行ったほうがいいのか、行かないほうがいいのか。

アーモンドは、一心不乱に呼吸を繰り返し、祈るニニーを見つめる。

その姿は、神聖ですらあった。

——今なら十二時までに戻れる。王子の期待には沿える。

——でも、彼女のやりたいことをやらせるのも愛なのではないか。

——王妃になるよりも、魔女になりたいと願うならばそれを叶えるのが.....。

アーモンドは、木によりかかった。ニニーの呼吸の音さえも聞こえてきそうな夜の森で、じっと、耳を澄ませていた。

昔聞いた童話で、十二時までに王子の舞踏会に駆け付け、王妃になった少女がいた。ニニーは、舞踏会に駆け付けない。いうなれば、舞踏会に行かなかったシンデレラなのだとアーモンドは思う。ニニーは、祈り続けている。これも修行の一環なのだろう。

——お前の未来も、『塔 16 逆で火星』だ。

——ある女に仕え、改革に身をささげる。

その時、アーモンドはなぜか、昔聞いた占いのことを思い出していたのであった。

夜は、刻一刻と更けていく。

9章 バニラ王子と、クミン王女

「王子。サンサーリンの王女とお話だけでもしてはいかがですか」

執事にそう言われて、バニラ王子はハッとした。確かにそうだ。遠い船旅を終えて舞踏会に出席してくれたクミン王女を、一人で放っておくのは国の王子としてあるまじき行為だ。ニニーを待っているとはいえ、クミン王女が影口を叩かれるようなふるまいをするべきではない、とバニラ王子も気づいた。

「ごきげんよう。サンサーリン特産のココナッツジュースも用意いたしましたよ。一緒にいかがですか？」

話しかけられたクミン王女も、ほっとした顔でバニラ王子を見つめる。遠い船出をしてたどり着いた国で相手にされなかったなど、どんな言い訳をしても母国では冷たい目で見られる。なんとか、最悪の道は回避できた、と思った。

「まあ、ありがとうございます。我が国の特産品をご存じなのですね」

「昔は、ヤシの木に登っていたことも知っておりますよ。一番ヤンチャな子どもだったと」

「あら、そんなことまで」

バニラの人懐っこい笑顔に釣られて、周りの人々もホッとしたように微笑んだ。礼儀作法も、気配りも、容姿も教養も、お似合いの二人だった。

このまま、上手くいけばいいのに。そう考える周囲の人々の期待には応えかねるように、バニラ王子は、ちらちらと扉の方を見つめる。

クミン王女は、王子のふるまいを見ないふりして、香り高い花を一輪、手に取った。

「バニラ王子が待っていらっしゃるの、ニニーですね」

「えっ。ご存じなのですか」

「わたくしも、ニニーのファンなんです。昨日、初めて会ったばかりですが、一目で好きになってしまいましたわ」

にっこりと笑うクミン王女に、バニラ王子もホッとした。ニニーのことを知らないままだったら、まるで騙しているような気分になるからだ。

「そうなんです。ニニーは、僕の憧れの人で」

「御存じですか？ ニニーは、「ハーブは朝摘むのがよい」と聞いて、朝と昼と夜と夜中に摘んで、成分が変わるか比較してみたそうですよ。結果、夜が一番効能が強くなることが分かったんですって」

「さすが、ニニーだ」

「教えられたことを鵜呑みにしないニニーの姿勢に刺激されて、周りの魔女たちも気づいたことを試すようになったそうです。みんな深夜まで実験を繰り返して、朝食の時間に報告し合うようになったと……」

ふう、とクミンはため息をつく。

本当に、ニニーはあこがれだ。そんな風に生きられたらと、昨晚から、何度も何度も思ってきた。

「ニニーなら、きっと新しい風を巻き起こせますわね。わたくしも、もっと挑戦していたら、今頃違う結果になっていたのかしら」

「いえ。伝統を守る人間がいるからこそ、自由に振舞えるのですよ」

「そうでしょうか」

「たとえば王は事実に注目して現実的な対応をする。王妃は、事実に対する人々の反応を見て、感情に寄り添い、希望になる。そうしてこそ、国民は穏やかに生きられる」

「わたくしも、そう教わりましたわ」

「ニニーには自由でいてほしいんです。羽根を折りたくない。どこまででも飛んでいくニニーを好きになったのだから……」

そこまで言って、バニラ王子は口をつぐんだ。確かに、そうだ。自由なニニーを好きだと思っていたのに、王妃にして国に縛り、子どもを産むことを義務にさせていいのだろうか。魔女の修行も奪って、朝に昼に夜に研究する道を奪っていいのだろうか……。

クミン王女には、バニラ王子の悩みが、手に取るように分かった。

「わたくしは、愛されなくても構いませんわ」

「えっ？」

「職業王妃でいいですわ。王族同士は政略結婚ですもの。ニニーのことを思ったままで構いません。でも、わたくしたちの子どもは、サンサーリン王国とエルメダーラ王国の懸け橋になれると思いませんか？」

バニラ王子は、息をのんだ。クミン王女は、ここまでの決意で舞踏会に出席したなかで、自分は一体、何を考えていたのだろうと思ったのだ。

「わたくしは、何もできないからこそ、せめて国の役に立ちたいと……」

「いええ。クミン王女。僕は、あなたを愛したい」

「え……？」

「あなたを愛し、あなたに愛される夫婦でありたい。僕はニニーが好きでしたが、それは、あなたと同じようにファンだったのでしょ。憧れであり、尊敬だったのです。僕は、共に人生を過ごすなら、あなたがいい。だから……こんな僕でも、構いませんか？」

クミン王女は泣きそうに顔をゆがめた。王妃教育を受けながら、挫折しそうになった

日もあった。どんなに頑張っても改革を起こせない自分が歯がゆかった。だからこそ、今こうして、自分を認めてくれるバナラ王子に求婚されたことが嬉しかったのだ。

周りの人々も、息をのんで二人を見ていた。この次の返事によって、国の命運も変わるのだ。

「ええ。喜んで」

クミン王女の言葉に、ワッと歓声が上がった。音楽が鳴り響き、人々は手を取り合っ
てダンスを始める。

ここに、サンサーリン出身のエルメダーラ王妃が誕生したのだ。

クミン王女がバルコニーの外をみると、箒にまたがったニニーとアーモンドが笑顔で
手を振っていた。それが幻覚だったのか真実だったのかどうか。けれど、ニニーもこの
婚姻を祝福してくれることが、嬉しくてたまらなかった。

——バナラ王子も、この国も、この国の民も、私が守って見せましょう。

クミン王女は、そう決意したのだった。

10章 それぞれの旅立ち

魔女学校を卒業すると、ニニーは辺境の地に旅立つことになった。

ショックを受けたのは、バニラ王子だ。

「国政を手伝ってくれると思っていたのに……。辺境の地にいつてしまったら、私は何十年もニニーと会えないのか」

ハラハラと涙をこぼすバニラを、王妃となったクミンが抱き留める。

「ニニーは、前から辺境の地に行くことが夢だったのです。自由にさせてあげましょう」

「でも……」

「立派な王になり、ニニーがどこにいても安全な国にしましょう。わたくしと、わたくしたちの子どもが、あなたと共に歩みますわ」

クミンの深い愛情に胸打たれ、子どものようにバニラは頷く。旅立ちの時が、迫っていた。

「じゃあ、行ってきます！」

ニニーは箒にまたがって、王宮の庭でそう笑った。

お付きには、アーモンドが選ばれた。バニラ王子は、もちろん付き添えない。信頼できる人に傍にいてほしいと思い、アーモンドに白羽の矢が立ったのだ。アーモンドは一つもなく賛成し、その勢いにバニラ王子が驚くほどだった。

「辺境の地を、頼んだよ。ニニー」

「手紙をちょうだいね。楽しみにしているわ」

王子と王妃に言われて、ニニーも、ニッコリ笑う。

「はあい！ 頑張ってきますね！」

そう言って、ニニーは空高く舞い上がる。

バニラは王子、そして王として。

クミンは王女、そして子どもたちの母として。

アーモンドは、ニニーの従者として彼女を守り。

ニニーは魔女として、辺境の地の開拓にいそしむ。

それぞれの責務を果たしながら、新しい旅路が、ここに始まったのだ。

トゥンリリス小説リライト「魔女と王さま」(前章)

著 ELYE

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
